

おけらになった話

小川未明

青空文庫

あるところに、あまり性質せいしつのよくない男おとこが住すんでいました。

この男おとこは平気へいきで、うそをつきました。また、どうしてもそれがほしいと思おもえば他人たにんのものでも、だまってそれを持もつて帰かえりました。

こういう人にんげん間まをば、世間せけんは、いつまでも知しらぬ顔かおをしておき

ませんでした。みんなは、だんだんその男おとこをきらいました。その

男おとこと交際こうさいすることを避さけました。けれど、そんなことで、この

男おとこは、反省はんせいするような人にんげん間まではなかつたのであります。

とうとう男おとこは、悪わるいことをしたために、捕とらえられて牢屋ろうやへい

れられてしまいました。いままで、自由じゆうに、大空おおぞらの下したを歩あるいて

いたものを狭苦せまくるしい牢屋ろうやの中なかで送おくらなければならなかつたので

した。

「あの男も、ついに牢屋へいれられてしまった。こんどは、すこしは、目がさめるだろう。そして、真人間になつて、出てきてくれればいいが……。」と、みんなはうわさをしていました。

牢屋へいれられた男は赤い舌を出していました。

「おれが魔法使いのことを知らないか、ばかどもめが……。」
といつて、冷笑していました。

この男は、いつ、その牢屋から逃げたものか、わずかのまに、そこにいなくなつてしまいました。

牢屋の番人は、たまげてしまいました。まったく影のごとくに消えてしまったこの男を、普通のものとは思われなかつたので

す。

男おとこを知しっているものは、そんなうわさをしてるやさきに、男おとこが、目の前めまえへ姿すがたをあらわしたものですから、びっくりして、

「はや、おまえは、牢ろうから出でたのか？」と、いうものもあれば、

「いつ、そんなからだになったのか……。」と聞きいて、あまり、

その許ゆるされようの早はやいのにあきれたものもありました。

男おとこは、ずるそうな目めつきをして、みんなの顔かおを見みまわしながら、

にやにやと笑わらって、

「なんで、こんな早く許ゆるされるものかな、おれは、逃にげてきた

のさ。しかし、おれを捕とらえておくなどということは、無む理りだよ。

おれは魔法まほう使つかいだからな。」と答こたえました。

みんなは、腹はらなかの中で、ほんとうに、この男おとこは、魔法まほうを使うつかのだらうか？ なんにしても、また困こまったことができたものだと思おもつたのであります。

男おとこは、さかんに悪いわることをしました。しかし、世間せけんは、それを許ゆるすものではありませんから、じきにまた捕とらえられてしまいましたが、こんどは、手てきびしくされて、ふたたび逃にげられないように、牢屋ろうやなかの中へいれられてしまいました。

「こんどは、ゆだんをして、この男おとこを逃にがすようなことがあつてはならないぞ。」と、番人ばんにんは、目上めうえの役人やくにんから注意ちゅういをされました。

番人ばんにんは、またと、そんなような手落ておちがあつては、自分じぶんの生せ

いかつ 活かんけいに 関係かんけいすると、不安ふあんに 感じかんましたから、日夜にちぢよ怠こたりなく、この男おとこを 注意ちゆういしたのであります。

「こんどは、あの男おとこも、逃にげ出だしてくるようなことがあるまいから、まあ安あん心しんしていてもさしつかえない。」と、彼かれを知しつて、迷めい惑わくを受うけたことのある人ひとたちは話はなをしていました。

ちようど、このとき、男おとこは、牢屋ろうやの中なかで、このまえのように大だ胆いたんにも、赤あかい舌したを出だして、

「おれを知らしないのか。いまに見みろ、魔法まほうを使つかつて、この牢屋ろうやから逃にげ出だしてやるから。」といつていました。

その男おとこは、まおったく人にん間げんとも思おもわれなかつた早業はやわざの名めい人じんで、また、さるのようきに、すばしこく木うえの上のぼへ登のぼることもできれ

ば、また風の^{かぜ}のように、すこしのすきまがあれば、そこからは出^だすことができたのであります。

あるあらしの^{ばん}晩に、この男は、ふたたび牢屋^{ろうや}から、姿^{すがた}を消^けしてしまいました。牢屋^{ろうや}の扉^{とびら}にかかっている錠^{じょう}もそのままであれば、なにひとつあたりに、かわったこともなかったのに、男^{おとこ}ばかりは、いなくなつたのであります。

こうなると、この男^{おとこ}のうわさは、世間^{せけん}にひろまりました。そして、平生^{へいぜい}、男^{おとこ}を知^しっている人々^{ひとびと}は、安心^{あんしん}して家^{うち}にいることができませんでした。また、取り締^とまる役^{やく}人^{にん}たちは、このままに捨^すててはおかれないので、こんどは、どういうようにしたらいいかということ^{きようぎ}を協^き議^ぎしたのであります。

ひろ 広い世間は、だれ一人として、この男を悪者だといって憎み、おそれ、きらわれないものがありません。こうなると、男は、思うように牢屋を逃げ出したけれど、自分の身を置くところがなかったのです。

あちらに隠れ、こちらに隠れしていましたが、捜索が厳重であつたために、また捕らえられてしまいました。

「おまえは、魔法を使うというが、こんどばかりは、逃げ出されないぞ。」と、役人はいつて、男を、鉄でつくつた、狭い牢の中に入れてしまいました。

男は、その鉄の牢の中では、自由に歩くことすらできませんでした。また、指を出すにも出されないように、外部は、金網で

張はられていたのです。

もう、こうなつては、赤あかい舌したを出だして笑わらうどころではありません。

男おとこは、たじつとしていました。どんなに寒さむくても、また、どんなに暑あつくても、ただ、じつとしていなければならなかつたので、さすがに男おとこはいまは後悔ごうかいしたのでありました。

「神かみさま、わたし、人間にんげんに生まれてきたばかりに、つい、みんなよりも楽らくをし、またおもしろいめをしようとする気きになりました。それで、うそをついたり、他人たにんのものを盗ぬすんだりしたのです。私わたしは人間にんげんになりたいたとは思おもいません。ほんとうに一むし匹むしの虫むしでもいいから、この強欲ごうよくな心こころと不正ふせいの考かんがえを、私わたしからうばってください。そして、私わたしを虫むしにしてください。私わたしは、虫むしとなつて、神かみさ

まのおぼしめしに従^{したが}つて、自由^{じゆう}に生活^{せいかつ}をしたいと思^{おも}います。神^{かみ}さま、どうぞ、私^{わたし}を虫^{むし}にしてください！」と、いつしんに、牢^{ろう}の中^{なか}で祈^{いの}つたのであります。

ある朝^{あさ}のこと、男^{おとこ}は、そこに見^みえませんでした。番人^{ばんにん}は、夢^{ゆめ}かとはかりにびっくりしました。

「あの男^{おとこ}は、どこへいったろう？ ねずみでさえこの金網^{かなあみ}の目^めはくぐれないはずだ。ふしぎなこともあればあるものだ。」といつて、さわぎたてました。

役人^{やくにん}たちは、集^{あつ}まってまいりました。そして、みんなは、頸^{くび}をかしばりました。

「この世^よの中^{なか}に、魔法^{まほう}を使^{つか}うというようなことが、はたしてある

ものだろうか？」

錠じょうのかかっているのを役人やくにんたちははずして、狭せまい牢ろうの扉ひらを開ひらいて中なかへはいり、くまなく、あたりを調しらべてみました。

このとき、一いびきのおけらが、入り口ぐちから出でて、だれも、それに気きのつかなかったまに、町まちの方ほうを指さして、大だい地ちをはつていったのであります。

もう、すでに世界せかいは、夏なつから秋あきにうつりかけていました。空そらの色いろは青あおく晴はれて、長ながくつづく道みちは、白しろく乾かわいていたのであります。

おけらは、あちらの青あおい空そらの下したに見みえる街まちの建たて物ものを望のぞんで、自分じぶんのすむところをその近ちかくに定さだめようと思おもったのです。とんぼや、はちは、美うつくしい羽はねを輝かがやかしながら、頭あたまの上うへの空そらを自由じゆうに飛とん

でゆきました。おけらは、なぜ自分には、あのような自由じゆうに飛とべる美しい羽はねがないのかと怪あやしみました。そして、途とちゆう中で水みずのたまったところに出て、自分じぶんの姿すがたを、その水すいめん面に映うつして見たみときにびつくりしたのです。

「なんとという私わたしは、みにくい虫むしに生まれてきたのだらう……。」

おけらは、恥はずかしくなりました。しかし、神かみさまは、これのために、この虫むしに、反抗はんこう心を起おこさせるようにはしなかつた。

そのかわりに、つつましやかな謙遜けんそんの心こころを与あたえられた。おけらは、どこか、野菜畑やさいばたけか、果樹園かじゆえんのすみに、あまり世間せけんに知られずにすむ、自分じぶんの小さな穴あなを掘ほってはいるために、乾かわいた道みちを急いそいでゆきました。——人間にんげんが一夜やにして、おけらになつたと

いうようなことは、ひとり神かみだけが知り、またこうした奇蹟きせきは、
 神かみだけがよくなし得うることでした。神かみは、自分じぶんの創造そうぞうしたおけ
 らが、いま道みちを歩あるいてゆくのを、じつと青あおい空そらからながめていた
 のです。

ちようど、このとき、美うつくしい花嫁はなよめを乗のせた自動車じどうしゃが通とおりま
 した。花嫁はなよめは、金銀きんぎん・宝石ほうせきで、頭あたまや、手てや胸むねを飾かざっていま
 した。そして、はなやかな空想くうそうにふけていました。その自じどう
 動車しゃは、町まちの方ほうから、同おなじ道みちをこちらに向むかって走はしつてきたの
 です。

神かみさまが、はつと思おもうまもなく、自じどう動車しゃは、おけらを轢ひきつ
 ぶして過すぎていってしまいました。このことは自じどう動車しゃの上うえに乗の

知っている花嫁はなよめも知らなければ、ただ神さまかみよりほかにはだれも知らなかつたことです。

神さまかみは自分が悪わるかつたと感じかんられました。そして、罪つみもない、おけらの一生しょうとしては、あまりに、みじめであつたと思われました。

「やはり、人間にんげんにしてやつたほうがいい。」と、考えかんがられて、

おけらは、特別とくべつのおぼしめしで、人間にんげんにされたのであります。

男おとこは、ふと目をさましました。すると、自分じぶんはよくないことを

して、捕とらわれて、牢屋ろうやの中なかにおりましたが、鉄てつの牢ろうにもいなければ、また実際じつさい、自分じぶんが魔法まほうを使つかつて、牢屋ろうやの中なかから消きえるなどというこゝとはあり得えなかつたことでした。

あるとき、自分は、そんなことを空想したことがあります。

そして、前夜、ふしぎにも、虫になった夢を見たのでした。

彼は、いまさら、口もきかなければ、したいと思うこともできない

ない虫もあるのに、口もきければ、したいと思うこともできる、

すべての生き物の中でいちばん自由に生活される人間に生ま

れてきて、心柄から、みずから苦しまなければならぬ愚かし

さを悟りました。彼の性質は、このときから、だんだん善

良に変わってまいりました。

それほどの悪いことをしたのででもなかつたから、男はじきに自

由の体となつたが、その後は、約束は守り、うそはつかず、ま

た悪いことをしなかつたので、人々から信用されるようにな

つたのであります。

——一九二六・八——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「赤い鳥」

1926（大正15）年10月

※表題は底本では、「おけらになった話《はなし》」となつています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おけらになった話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>